

裏・探り合い

※ 92「探り合」if のifとなります。本編ではありません。

視界が暗くなると同時に頭が重くなる。痛みはない。ただ、とにかく重い。何か鉛でも内側に埋め込まれたように。

悲しいのだろうか？　そういうわけではない。徹のことは好きだけれど、そういう感情は考えたことも無い。けれど、その彼が他の女の子と身体を重ねている。

保健の授業ではひたすら愛を強調して美しい行為として教えられていたけれど、今目の前で見ている二人の行為は変な声を出しながら体をぶつけあっているだけ。時折見かける喧嘩のよう。せいぜい相撲。美しいと言いたいもの。

時折やんちゃな態度を見せる徹だけに、まるで赤ちゃん返りしてるかのよう。酷く情けないような気がしてしまう。

「くくく……。二人ともやることやってんだな……」

「それがどうしたって言うんですか……」

「気付かないのか？　よく考えてみなさい。公民館で不純異性交遊しているようなことが知られたらどうなると思う？　睦美がしようとしている私立受験やら学童保育どころじゃないだろ？　そういうことだ」

「それが……」

「乳繰り合ってる女と今野、高杉はどっちを守ろうと思う？」

「え？」

「今野は高杉にエッチさせてやらないんだろ？　だからああやって他の女とセックスして欲求不満を解消してるんじゃないか。多分、高島もノリノリだぞ？　さっき見てたけど、高島の方から誘ってたしな」

「だから、何が言いたいんですか……」

困惑で頭が上手く働かない。睦美と徹がセックスをしていることに一体どんな意味が？　ただの性欲処理……。その性欲処理ができるのであれば、二人は特別な関係であり、それを邪魔する者がいたとして……？

連想ゲームのように一つ一つゆっくり考える。その内にだんだんと顔が強張る。それに気づいたのか勝行はにやりと嗤う。

「今野が騒ぎ立てたとして、その時に高杉は本当にお前の力になってくれるか？　高島の方を優先するんじゃないか？」

絶対ではないけれどその可能性はある。徹は優しいし頼りになるけれど、自分一人に対して優しいわけではない。他の困っている子にも同じように優しい。さらに今、彼は睦美と特別な関係になっている。失う物の大きさを考えれば睦美と自分ではどちらが上か？　その時徹は誰を優先して守ってくれるのか……？

徹を疑いたくはないけれど、それでも自分を睦美と同じように守ってくれるとは思えない。それどころか徹が勝行の言いなりになるかもしれない。それは一見自分に関係無い被害のようにも思えるけれど、徹が勝行の側に立つと言うことは結局巡り巡って……？

ありえないこともない。可能性がある。蓋然性で考えても今こうやって裸で生徒の前に立つような勝行なのだ。そもそも不純異性交遊を指導するような人間がのんきに覗きをしているはずがない。何か使えると思っているからこそこうやって見逃しているのだ。

壁を隔てて繰り広げられるのは互いの好意と性欲、好奇心を埋めるため行為がなされている。かたや自分は勝行のアレを無理やりに啞えさせられて、さらにはあの苦い汁を……。

例の放課後、祐樹の臭いチンポを向けられ、無理やり開かされた口の中に欲望の苦い汁を注ぎ込まれた。さらにはそれを撮影されて脅されて……。

どうして綾子は自分を虐めるのだろう。そして、どうして徹は自分を守ってくれないのだろう。あの時もさっきだって、今もお……。

「どうしてよ……。なんであたしばかり……」

涙も流れず、とつとつと零すのみ。哀しみが裏返って無感情にまで達していた。

「あ、あの……」

続く声はまるで機械のような平坦な音声に思えた。



「ん？ なんだ」

「あ、あの……先生……相談なんですけど……、高島さんに興味ありませんか？」

「どういう意味だ？」

「だ、だって……、その、高島さん、おっぱい大きいし、エッチな子だし……。今だって徹とえ、エッチなこと、してるし」

目を壁に向けたまま話す真奈からはだんだんと震えが消えていく。相変わらずゆっくり話すのは、自分の考えを確かめながらの為だろうか。

「高嶋さんなら、その、受験のこととか、学童保育のことで騒がれたくないだろうし……、あたしより多分、ずっと言うこと聞かせられるんじゃないかなって……思っ」

「なんだ、今野、友達を売るのか？」

「……別に友達じゃないですし、それに、こんなところでエッチするような子だし、別に、先生としてもそんなに……気にしないんじゃないかなって」

「どうやって？」

「えと、徹をあたしと呼び出して、その間に先生がお風呂に入ってさっきのことと受験のことを言えば多分、それで言うこと聞くんじゃないかなって……」

「雑な提案だな。そんなことより先生は今野のことを知りたいんだが？」

「あたし、お、大声出します」

破れかぶれの思いつきだけれどこれしかない真奈は勝行を強く睨み返す。

提案はあやふやながらも勝行も強引にことを進めて真奈が騒いでは全てを失ってしまう。「筋縄ではないか」と思い直し、ひとまず頷く。

「あたし、先生が高島さんと何かしていることは秘密にします。だから、中倉さんのことをなんとかしてください。その取引です」

「取引と来たか。こいつは頼もしい。お互いに一応の損得があるわけだ。くく、いや、まさか今野がそんな狡い事を提案する子だなんて思わなかったなあ……くく」

勝行は愉快そうに嗤うと一旦トイレの方へ行き、カメラを手に戻って来る。

「今野、先生は今野のことを信じたい。だが、やっぱり証拠が無いとな。今の言葉をもう一度、カメラの前で言ってもらおか。お互いの信用の為にこういうのははっきりさせておきたい」

「……はい、わかりました」

「そこに座れ。股を開いて割れ目を見せるんだ」

「なんでですか？」

「ふん。今野の覚悟を見ようと思っ」

「……」

言われるままに座り、そこで股を開く。ジーと機械音が響く中、レンズが怪しく光っていた。

「あたしが徹をおびき寄せますから、その間に先生は高島さんの所に行って脅してくだ

さい。あたし、誰もお風呂場に来ないように見張ってます」

「それは自分の為に高島を売るってことだぞ？」

「はい。でも、高島さんはエッチ好きそうだし、いいんです」

「くく、よし、わかったぞ。そうしよう」

勝行は録画を終えると真奈の言うとおりにさせた……。



脱衣場へ行き、服を着る。お風呂に入れなかったせいもあって身体は微妙な濡れぐらいで寒い。けれど、これから始める大事を前に気持ちが高揚していた。

同級生を売り、自分を守る。

最低な行為だと自分で思う。けれど、それ以外に自分を守る方法が見当たらない。それに、自分だって誰かの最低な行為で今こうして窮地に立たされているのだ。まるでリレーのよう。誰かが悪意のバトンを渡したのだから、自分もまたその役割を果たしただけ……。

そう自分に言い聞かせ、真奈は戸の前で深呼吸をする。

「徹——！ いつまでお風呂入ってるの？ 先生呼んでるよ」

ばちゃんとお湯の音がした。驚いてお風呂に落ちたのだろう。

ここでお風呂場に入れば睦美を罠に嵌める事にもならない。けれど、そうなれば勝行からの脅しを含む要求が来る。だから戸は開けない。バトンは睦美に投げる。彼女は聡明だし、もしかしたら勝行の脅しにも屈することなく、逆に彼の悪行を止めてくれるかもしれない。先ほどの宣誓が睦美に知られれば立場は悪くなるけれど、勝行から脅されて無理やり言わされたと言えはいい。全裸であることも脅されていたことを信じてもらえる可能性を高める。だから多分……。

言い訳を頭の中でぐるぐる回しながら徹が来るのを待つ。

「……お、おう。わりいわりい。広い風呂だからつい長湯をしててさ……」

頭を掻きながら戸を開く徹。できるだけ狭く開き、出ると同時にぴたりとしめる。背後に居る誰かを隠すつもりなのが見て取れる。

勃起したチンポはタオルにこんもり山を作っている。もしかしたら最期までできていないのかもしれない。だとしたら少し悪いことをした。その一方で自分が辛い時に他の女とのんきに乳繰り合っていることも腹が立つ。

「ほら、早く。そろそろ夕飯届くみたいだし」

「ああ」

急ぎ服を着ようとする徹はボタンを掛け間違えたのか、もたもたしていた……。

真奈の声に慌てる二人。さすがに行為の最中を見られるわけにはいかず、慌てて風呂に潜る。

「げ、真奈だ……。やべ、どうしよう」

「どうするもこうするも……。とりあえず徹は先にお風呂出て。今野さんを引き連れて出て行ってよ。大丈夫そうだったらタオル忘れたって大声出してくれたらいいよ」

「わかった。でも、もし真奈が風呂に入ってきたら？ あいつも結構俺のこと気にしないところあるし」

「うーん、それならあたし、一旦トイレの方に隠れるから……」

お風呂で倒れた人をすぐに運ぶための緊急搬入口を指差す睦美。トイレもあるのでそこなら鍵を閉めることができるので安心だ。

「よし、それじゃ……」

徹は浴槽を出るとタオルでまだおさまりのつかないチンポを隠し、風呂場を出た……。

徹を見送った後、睦美は非常用兼トイレに入る。これで二人がお風呂に入っていたことは誤魔化せる……のだろうか？

睦美は何か引っ掛かりを感じつつ、便器に腰掛ける。これでもし新風呂の方が入れなかったら、色々言い訳が付かない。

「なんでだっけ？」

普段から同級生男子を弟扱いしておきながら、いつの間にか徹を男として見ているのだと理解し、くすくと笑う。

「んっ……」

股間がむず痒い。途中で止めてしまったせいで切なさがある。とろっとした粘液が奥から溢れてきてしまう。本当ならあのまま最後まで……。

徹のチンポは弟の違いつかり包皮が向けて性器が露出していた。あれを自分の大切な部分で受け止めたらどんな気持ちになるのだろうか？

これでは母のことを笑えないとおもいつつ、コンドームの準備をしている分だけマシとも思えた。

トイレトペーパーでそれを拭い、捨て流す。誰かが旧風呂に入ってきた様子も無いし、そろそろ新風呂の方にうつろうと思う。

「よいしょっと……」

反対側の扉を開けると白い湯気で室内がもやもやしていた。

「なんだ、お風呂沸かしてたんだ」

ほっとして浴槽へと向かう。なんだかんだ言っても新しいほうの風呂に興味があった睦

美はまだ疼く気持ちを抑えて洗い場へと向かう。

徹との交わりの残りを洗い流すのは寂しいけれど、さっぱりしたい気持ちもある。それに先ほどの急な別れで徹も気持ちが自分に向かっていているはず。むしろ焦らしたぐらいがちょうど良い。

そう思い直し、早速身体を洗い流す。

泡立ちの悪いソープを使いシャワーで流す。ふと背中が寒い。物理的なモノではなく、予感的な理由。

「え？」

鏡に何か映っている。人影。誰だろう。そう思い振り返るとそこには全裸の勝行が居た。

「きゃっ」

悲鳴を上げるも桶でお湯をぶっかけられ中断する。その間に腕を取られ、口を押えられる。

「高嶋、騒がないほうが良いぞ」

強く抑えられた口に恐怖が起こる。彼の目的が何かは知らないけれど、もし騒げば何をされるかわからない。もしかしたら殺される？ それは考え過ぎだろうか？ けれど、この短絡的な男ならそれもわからない。

了承を示しこくこくと頷くと、勝行は腕を下ろす。



「な、なんのつもりですか……」

小声で尋ねつつ、胸元を隠す。好きでもない男性に裸を見られるのも嫌だし、勝行の性欲で満たされた視線が気持ち悪かった。

「くく……、まあなんだ。話が早くて助かる。高島、お前、さっきそっちの風呂で高杉とセックスしてたろ？」

「……！？ な、そんなこと……」

「いい、いい。誤魔化すな。先生ばっちり見たんだよ。それに録画もな……」

勝行は風呂の縁に置かれたカメラを指差しほくそ笑む。この余裕の態度から彼の言葉が真実であると察した睦美は特に抵抗をしない。

「……わかりました。で、一体……」

二度問い直すと勝行は拍子抜けした様子になった。きっと慌てふためくのだろうとでも思ったのだろう。

「ふん、つまらんなあ。ま、こっちの方はたまらないんだが……」

胸元を隠す腕を取り、乳房に手を伸ばす。武骨な指は遠慮なく乳房を揉み始めた。

「んっ、やめてください……んっ……」

抵抗を口にするもその手を跳ねのけることもしない。勝行の目的が何かを理解した彼女は大人しく身を任せるほかに無かった。

「くく……。どうだ？ 気持ち良いんだろ？ こんなデカイおっぱいじゃ揉まれないとコリがひどいんじゃないか？ くくく」

「どうでもいいですよ。そんなことより……、先生は一体何が目的なんですか……」

「お前は頭が良いな。じゃあ先生がしたいこともわかるだろ？」

「わかりませんね」

「くく、私立受験するんだって？ 同級生とセックスするような奴が入学できるとは思えないぞ？」

「……脅しですか？」

「さあなあ。だが、先生、高島と高杉がセックスしている動画をうっかりネットに流しちゃうかもしれないし……」

「なら今すぐ消してください」

「それはダメだ。教え子の大切な愛の行為だもんなあ。二人がしっかり愛し合っている、愛し合える人間に育ったことを教師として嬉しく思うぞ」

「……どうしたら消してくれるんですか？」

行為を押揃されたことに睦美は真っ赤になり、ぎろりと睨む。だが、優位性を確信している勝行は念仏ほどにも気にしていない。

「そうだなあ、先生にも愛を恵んでくれないか？」

「だれがあんたなんか……」

「それに学童保育の件もだなあ、先生、うっかり書類に不備を作るかもしれないぞ？」

「卑怯です！ 最低男」

「ははは、高島はカワイイな。先生はいつもそんなこと言われてて慣れてるんだよ。お前ら猿みたいな生徒を相手にしていて、今更悪口言われて傷つくと思うか？ 反省するはずないだろ？ 高島の言うとおり、先生は卑怯な最低男だ。そして高島は先生の言うことをきくしかないんだ。さ、跪け、どうすればいいかはわかるだろ？ さっき高杉にしたようにするんだよ」

「誰が、そんなこと……するもんですか！」

裸のまま、睦美は勝行を睨み返していた……。

「んちゅ、んちゅ……ぺろちゅ……ちゅ、んちゅ……ちゅば……ちゅう……はむちゅ、ちゅ……ああむ……ちゅ……」

ちゅ、ちゅぶ、ぬちゅ……ちゅ、ちゅ……ちゅ……ぴちや……ぬちゅ……ちゅ……。

湯気の揺蕩う新風呂場ではねちっこく粘つく水の音が響いていた。

椅子に座り大股開きの男性と、その股間に頭部を近づけ前後させている女子が居た。

「あー、いいぞ……、先生、気持ちいいなあ……。うっ、我慢汁がすごい出る。全部飲むんだぞ？ あー、キモチイイなあ……」

「んぶ、んごく……ちゅ、ちゅ……ぺろ……ぶはあ……んう……はあはあ……最低男……。んちゅ……ちゅ……べろべろ……ちゅ……」

「はあ……、その最低男のチンポはうまいか？ くく、先生のチンポ、さっきから美味しそうに舐めてるじゃないか」

「んちゅ……ぺろ、ちゅ……ぶは……、こんなチンポ、誰が……。それに包茎だし、臭い……。徹のはちゃんと剥けてたし、こんなに臭くなかった……んぶ！ ぶう！ んぶう！ ちゅぶう……じゅぶちゅぶ、ごく……んごく……んぶぶ……ちゅう……」

口をとがらせる睦美を見て勝行は強引に頭をおさえ、股間に押し込む。

「んぶう！ ぶう……ちゅ……んちゅ……ぶはあ……苦しい……んちゅ、ちゅ……やめ……んっ、苦しいです……先生、やめて……」

「高嶋が先生のことを悪く言うからじゃないか。先生傷ついたぞ……。ちゃんと謝らないとなあ」

「んぶ……ちゅ、ちゅぶ……んちゅ、ぐ、ごめんなさい……。言い過ぎました……んちゅ……ちゅ……ぶぶう……ごく……」

「ふん。わかればいい。ほら、続けなさい」

「……はい……ちゅ、んちゅ……ちゅ……ごく……ちゅぶちゅぶ……ぺろぺろ……はあん……ちゅ……はむちゅ……」

跪き、チンポを舐めさせられる睦美は一生懸命に舌を動かす。

勃起しているのだろうけれどどこかぶよぶよした勝行のチンポ。どろっとした粘液が生臭く、小便臭さも徹のに比べて強かった。

鼻をつまみたくなる臭いに涙がこぼれる。吐きだしたいけれど頭を抑えられてむりやり口に押し込まれるのはえづいて辛い。仕方なく粘液を唾液で無理やり飲み込み喉を鳴らす。その従順な様に勝行は満足そうに嗤った。

「くく、委員長は偉いなあ。言われた通りにしっかりとチンポを舐めてるんだからなあ。あ、それともともとフェラチオが好きなのか？ そうだなあ。さっきも高杉のを美味しそうに舐めてたしなあ……」

「ぺろちゅ……誰が……こんなこと……ちゅぺろ……」

先っぽの余った皮を唇で含み、ゆっくりと捲る。白い恥垢が薄く広がるそれはさらにア

ンモニア臭をさせる。それでも我慢して舌を這わせ、苦味と塩味を唾液でだらだら流していた。

「くく……、良い気持ちだが、せっかくだしそのデカイおっぱいも使ってくれないか？」

「ちゅ……ぺろ……んちゅ、え……どういう……」

脇から抱えられ、そのまま股間に胸元を押し付ける格好にさせられる。当然おっぱいがチンポに当たり、粘液で汚してくる。

「自慢のおっぱいでチンポを挟むんだよ。パイズリだ。わかるだろ？」

「知らないです……」

拒んだところで結局は抗えない。睦美は仕方なく乳房を外側から持ち上げ、チンポを挟み込む。

「おお……こんな感触なのか……、睦美のおっぱいは……、いいぞ、キモチイ……。そのままおっぱいでもみもみ擦ってくれ」

「んっ……んう……」

「涎垂らして滑らかにするんだぞ。もっと密着させて、隙間なくな」



「……ああ……んべえ……」

涎をおっぱいに垂らしてチンポを挟む。ぬちゅっとイヤラシイ音を立てながら空気が入らないよう密着させる。

自分でも大きいと自慢に思っていたおっぱいは勝行のチンポをしっかりと挟み、むちゅねちゅと音を立てる。

「んう……もう……こんなことさせて……この変態教師……」

「ああ、いいぞ……キモチイイ、そのまま先っぽを舐めるんだ」

「これを舐めるなんて……くう……ちゅ、ぺろ……ちゅ……ちゅう……」

おっぱいの間から生えたようなチンポに舌を伸ばす。さらに勝行の方へのめり込むことでようやく先っぽが口に含まれる。

「こらこら、おっぱいちゃんと揉まなきゃダメだぞ」

「……」

むっとしつとも言われた通りにチンポをおっぱいで揉み扱く。

ぬちゅぬちゅ、ねちゃねちゃと耳障りな音を立てながらおっぱいの中でチンポはびくびくと動いていた。

「んちゅ、ぺろ……ちゅ……ああんもう……ちゅ、ぺろ……ちゅ」

おっぱいで挟んでいるとどうしてもチンポが口から逃げてしまう。何度も唇でちゅちゅとキスし、我慢汁をちゅうちゅ吸ってしまう。

「んごく……んう……もう……ちゅ……ぺろ、ちゅ……」

思わず飲んでしまう。ねっとりとしたそれは喉に絡みつき、臭いを嫌でも意識させてくる。

男の人とエッチなことをしている。それも無理やりに。その悔しさのせいなのか身体が熱くなる。そしてお腹の奥も……

「んちゅ……ちゅう……んふう……ふうん……ちゅ」

「どうした？ おっぱいの動きが甘いんじゃないか？ もっと先生を気持ちよくしてくれないと困るぞ？ ん？ ちゃんとおっぱいでチンポ挟まないと、ほら」

刺激が物足りなくなった勝行は手を伸ばしておっぱいを強く揉んで催促した。

「ああん！ んう、いやあん！」

すると先ほどの不機嫌そうな低い声とは違った甲高い声が出た。

「ん？ どうした？ 変な声を出して……くく、なんだ、もしかしてパイズリして高島

も気持ち良くなったのか？」

「な、そんなことありません……。アタシは別に……んっ……ああ、んっ！ さわ、触らないで！ ああん！ ああん……ああん」

強がる睦美に構わず勝行はおっぱいに手を伸ばす。たふんとした巨乳を下から持ち上げるようにして触り、やや強めに揉んでいた。

「んうああん……んっ、んっ……はあはあ……んっ、ああん……先生……だめ……んっ、

触らないで……ああん……んっ！ んっ！」

乳房を強引に揉むと睦美は喘ぎ、逃げるように身体を起こす。口からは粘つく汁が白い泡だまりを見せつつ垂れる。それは我慢汁だけではなく、彼女自身のせい。

「くく、高島、お前の乳輪でかいんだなあ……。まあ巨乳だから仕方ないか……。こんなにおっきいと下着選ぶのも困るだろ？ はは、こんなに勃起させてなあ……。エロイ乳首だ」

「くふうん……やめ……ああん、触らないで……んっ！ ああん、そんなに強く抓まないで……あっ……ああん……だめえ……」

「気持ちいいのか？ ん？ 言いなさい。じゃないとこのまま乳首を思い切り責めるぞ？」

「ああん……そんな、だって……んっ、はあはあ……あ、あ、あ……ああん！ んっ……いい！ キモチイイです！」

「くく、よく言えました。全く高島は素直じゃないなあ。キモチイイならちゃんと良いって言うんだぞ？ いいな？」

「……はあはあ……んっ、ああん……はあはあ……はい、んっ……ああん……わかりました……。んっ、ああ、んっ！ きもち、いいです……」

乳輪をくすぐられ、勃起した乳首を粘液塗れの指でねちゃねちゃ揉み解される。そうされると気持ちとは別にどんどん気持ち良くなってしまふ。声は上ずり隠すこともできそうにない。悔しさを噛みしめながらも気持ち良いと正直に告げると、身体がふわっと素直に快感を放ち始めていた。

「んっ、んっ、んっ、んっ……ああん……はあん……んっ！ 先生……ああん、きもちいいです……ああん、気持ちいいです……すごく……」

「なんだ、高島、急に素直になったなあ……。よし、先生も頑張っちゃうぞ。もっと高島が気持ち良くなれるようにこうやって乳首をぐにぐにっとして……」

「んっ……ああん、先生……あたし、気持ちいいです……。先生に乳首弄られて……きもち、いいです……。きもちよくしてもらってます……。ああん、なんで？ なんでこんなことされて……キモチイイの……あたし、変だよ……」

膝立ちになりおっぱいを揉まれるままの恰好の睦美。だらしなく半開きの口からは粘液質な唾液が垂れ、瞳は涙で湿っていた。

「んふう、んふう……はあん、はあはあ……んっ……はあん、せんせい……きもちいいです……ああん、おっぱい、触られて……」

ねちっこく乳首を弄られることに睦美は抵抗する気持ちを削られていく。徹としていた時のようながっつくような求められ方ではなく、気持ちの外堀をゆっくり埋められ、快感から逃げられなくさせられた気分。

「それ」

勝行はバスタオルを敷くと、そこに睦美を仰向けにさせる。そこへ覆いかぶさり、乳首

を口で吸う。

「んっ……やあん……きやう、んっ、ああん……乳首……そんなふうに……あん、あん！
かんじゃ……嫌……んっ、痛い……のに……んっ、ああん」

右の乳首を口に含まれ、ちゅっちゅと吸われ、とろけるような気持ちにさせられたと思うときゅっと噛まれて引き戻される。

噛まれると痛いの、痛みが引く過程で快感が背筋をぞくぞくさせる。比例してお腹の中が熱くなり、股がぬるぬるさせられる。

「んっ、んっ……ああん、先生……いやあん……んっ、おっぱい、さわっちゃ……んっ、きもちいいの……せんせいに、おっぱいチュウされて、気持ちいいです……」

せがまれる前に自分から声にしていた。言葉にすることで自分の身体にされていること、起こっていることを再認識できる。それが新たな快感に繋がるのだと悟り、堪えられなかった。

「はあん、んっ……んっ、くうん……ああん……んっ……え？ あ、ちよ、そこは……」
乳首で遊んで睦美がよく喘ぐことに気をよくした勝行は、さらに手を進め、今度は彼女の股に指を忍ばせる。

「んっ……ああん……、先生……そこは……」

ぬるぬるの汁が奥から出ている。それを暴かれるのが恥ずかしい。急に顔が熱く、赤くなり、睦美は拒むように勝行に手を伸ばす。

「大人しくしなさい。ここがどうなってるんだ？ ん？ なんだ、ぬるぬるじゃないか……。そんなに徹とセックスして気持ち良かったのか？」

「別にそういうわけじゃ……」

「正直に言いなさい。全く、少し素直になったと思ったらもうこんな反抗的になって。ここがこんなに濡れてるのはどういうことだ？ こんなにねばねばな愛液垂らして。高島はエロい女だなあ」

「だって……んっ、だって……先生が……んっ、なんか、先生にされるたびにお腹が熱くなって……おしっこみたいに出ちゃうんです……んっ……」

最初こそゆっくりかき回す程度の刺激だったが、中指がぐいっと入れ込まれると電極を直に突っ込まれたかのように背筋がぴんと伸びる。

「んっ！ ああん！ 先生……そんなこと！ ああん……んっ！ だめえ……」

「ん？ ここが良いのか？ こういう風にされて気持ち良くなってるのか？」

「ああん！ そうです、そこ、そこ弄られて！ あたし、すごい気持ち良くなって！ ああん！ だめえ！」

「ちゃんと言いなさい、おマンコだろ？ おマンコを先生の指で弄られて気持ち良くなってるんだろ？ 言いなさい、言え！」

「んっ！ ああん、だって、おまんこ……んっ！ 気持ち良くなって、先生の指で、んっ！ ああん、おマンコ弄られて！ 気持ち良くなってます！ キモチイイの！」

悲鳴に近い声を上げ、睦美はぎゅっと目を瞑る。瞼の裏では快感が火花を散らすかのような錯覚が起こる。どんな快感は高まり、下半身が切り離されているかのような気になり、制御がきかない。恥ずかしくも失禁しそうな予感が身体に起こり、慌てさせられる。

「んっ、だめ、せんせい！ おねがい、やめ……やめて！ あたし、おしっこ、おしっこもれちゃいそう……んっ！ だめえ」

「なんだ？ 漏れそうなのか？ だめだぞ、我慢しないと。高島はお姉さんなんだぞ？ そんな幼稚園児みたいなおもらしなんてだめだぞ！」

睦美の快感の弱音に勝行はにやりと笑い、人差し指を舐めると中指と二本でマンコを挟む。

ちゃっばちゃっばと水を弾けさせながら割れ目を撫で抉る。

「やあん！ やんっ！ やんっ！ やんっ！ やんっ！ ああん！ んっ！ だめ、だめだめだめ！ ああん！ いく！ いっちゃう！ あ、出るの！ きゃあん！」

悲鳴を上げながら身体を丸くする。それでもマンコを虐める指の動きは止まらない。ぱちゅぱちゅと万雷の拍手のような水音が室内に響く中、睦美が肩を震わせるとばしゅ……と股間から飛沫が迸る。

「きゃ、あ、あ……だめ、恥ずかしい……見ないで！ ああん……とまらないよ……んっ……だめえ……」

恥かしさに顔を真っ赤にして股間を隠そうとする睦美。けれど飛沫はとめどなく迸り、勝行をびしゃびしゃと汚す。

「はは、すごいな。潮吹きだ。睦美はしおふくんだなあ……くく……あーあ、先生びしよびしよだあ……」

「ああ、ああ……んっ、いやだあ……恥ずかしいよ……」

顔を覆って涙ぐむ睦美。時折肩を震わせるのは恥かしさだけではなく、甘い吐息を漏らしていた。

「んっ……んう……もう、許してください……あたし……恥ずかしくって……」

バスタオルに滲む生暖かい液体。白い泡をいくつか造り、それもすぐにはじけて消える。

「情けないなあ、高島は。これじゃあ弟に対してしめしもつかないだろうに……。おしっこ漏らすようなダメなお姉ちゃんなんだなあ……」

「だって、先生が無理やり……」

「無理やりなんだ？」

「だからその……、おマンコを弄って来て、それで我慢ができなくなって……」

「それで？」

「それで、漏らしちゃいました……」

消え入りそうな声を溢し、俯く睦美。勝行は声が大きくならないように我慢する。

「くく、お仕置きしないと。さ、お尻を出しなさい」

「だって、先生が……」

「ほら、早く……」

「はい……」

仕方なくお尻をつき出す睦美。

丸みのあるずっしりとしたお尻は肉厚があり、触れると柔らかな感触がした。他の女子に比べてあまり運動をしていないせいもあり、少しだらしない。

「なんだ、ぶよんぶよんじゃないか。ちゃんと運動してるのか？」

「そんな暇……なくて……」

「ダメじゃないか。体育もさぼってるし、これからは真面目に授業を受けるんだぞ」

「はい、ごめんなさい……」

「よし、お仕置きだ……それ」

「あん！」

ぱちんと良い音を立てて睦美のお尻がなる。またもパチン、パチンと音を立て、お尻がぶるんぶるんと震えていた。

「ああん、あんっ！ あんっ！」

音のわりには痛みが薄く、むしろ敏感になっていく内側にかすかに伝わる刺激がもどかしい。もっと気持ち良くしてほしいとすら思う睦美は自然と勝行を見ていた。

「ん？ どうした？ 高島。先生を睨んで……」

「睨んでなんて……んっ、ああん！ んっ……あはあん……」

割れ目付近を叩かれて振動が直でお腹の重いところに伝わる。そこが刺激されると足腰に力が入らなくなり、内側からまたお汁が滲んでしまう。

「ああん……んっ……ああんっ！」

「なんだ、高島はお尻を叩かれて気持ち良くなってるのか？ この変態め……。ここを弄られておしっこもらすし、本当にダメなクラス委員だな」

勝行は叩くのを止めると中指と薬指を睦美の割れ目に立てる。

「んっ……ああんっ！ あん！」

淫らな行為を期待する汁は二本の指に絡みつき、内側へと誘う。期待で熱くなる膣内は指に襲を絡みつけるように締め付け、ぬちゅっといやらし音を立てていた。

「睦美の割れ目はキモチイイな。温かいし、でこぼこだし……。ここにチンポ入れたらキモチイイだらなあ……」

「や、やだ……それは……」

「くく、高杉か？ 猿みたいになっただなあ、二人とも」

「そんな言い方……あたし……だって……徹が、かつこよかったから……」

「くく、あんなチビのどこが良いんだか……。まあいい。そんなことより高島がちゃんとセックスできていたのか、確かめてやらないとな」

「え……先生、ウソでしょ……そんな……」

「先生は高島が大人の女になったかどうか知りたいんだ。教え子がちゃんと成長したの



かどうか、それを知るのが教師の醍醐味だ……」

「だ、だめです！ そんなこと！ やだ、やめて……それだけは……」

「いいじゃないか、初めてじゃないんだしなあ。睦美の処女をもらえなくて残念だが、こうしてぬるぬるのおマンコを見ていたらどうでも良くなった。さて、高島、先生の入れるぞ……」

勝行はチンポを握ると睦美の割れ目の筋に合わせて上下させる。彼女はよつんばいになりながらその動作に合わせて身体をカクカクさせる。

「や、だめ！ 先生、お願い、それだけは嫌です……。それ以外なら何でもするから！ おねがい、やめ……あ、あ……あつ、うっ……だ、だめ……やめ……ああん」

ぐいっと股間を押し出すと睦美は拒むように手を伸ばす。なんとか逃れようとするも自分の漏らしたおしっこでぬるりと滑り、前に進めない。

「や、だめ……っ……やだ……ああん……先生、酷い……酷い……んっ、ああん……」

ぬぶぶぶっと音を立ててチンポがねじ込まれていく。互いの愛液がぬるりと溢れ、結合部から粘液が伸びる。

「くう、気持ちいいなあ……。きつきつで先生のを締め付けてくるぞ？ ああ、本当に気持ち良い」

「んっ……だめえ、抜いて……やだぁ……んっ、あぁん……はぁん……だめ、先生、お願い……抜いて……」

じゅぶちゅぷと音を立てて勝行は自分のチンポを睦美のマンコにねじ込む。軽く抜いてはぐいっと押し込み、愛液をぶちゅぷとはじけさせる。

「あはぁん！」

睦美はそのたびに快感の声を漏らし、バスタオルを掴む。

「くう、気持ちいいなあ。高島のマンコ……。くそ、高杉の奴、処女を食いやがってなあ……」

睦美のイヤラシイマンコを責めぬきながら、すぐにでも射精してしまいそうな自分の股間を叱咤する。

膣壁は勝行の包茎チンポを優しく包み、皮を剥いて敏感な亀頭を救急締め上げる。じゅくっと滲む我慢汁は睦美の膣内に吐きだされ、ぬちゅぬちゅとイヤラシイ音を立てさせる。

「んっ、んっ、んっ……やめ……んっ、ろ……んっ、あぁん……い……や……いやだ……んっ、あぁん、なんで……んっ、きもちいいの……」

唇を結んで声を我慢する睦美、バスタオルを掴んで堪えているようだけれど、その力みが返って膣の締め付けを強めてしまい、勝行を抱きしめてしまう。

「なんだ、高島、そんなに乱暴な……。いまさら」

不思議がりつつ腰を止めることはしない。

すばんすばんとリズムを速め、遠慮なく我慢汁を吐きだし、ぬめりを良くしていく。

「んっ、んっ、んっ！ おねがい……やめ……あぁん……あつ、んっ、きもちいい……なんで……くう……ふうん……やぁん、あぁん、きもちいいですう……」

睦美は半ば投げやりになりながら正直な気持ちを溢す。

「なんだ？ さっきから……、気持ち良いなら良いと言いなさい。それに乱暴な言葉遣い。先生とセックスして嬉しくないのか？」

「誰が……んっ、うれしいもんか……んっ……あはん、先生、キモチイイよ……んっ、だって、あたし……はじ……んっ、め……んっ……はぁん、せんせい……先生……」

抵抗の気配を見せつつもチンポをねじ込むとすぐに悶えて甘えた声に代わる。膣は相変わらずチンポを抱きしめて複雑に刺激してくる。

「高嶋あ……、さっきからどうした？ 素直になりなさい……。先生にセックスの出来る女になったことを教えて欲しいんだぞ」

「んっ、だ……だって……あたし、まだ……んっ……あぁん！ くうん……だめ……あぁん、きもちいいよ……せんせいのおちんちん……きもちいいの……あたし……なんで……だて、まだ……しょ……処女だったんです……んっ……」

「しょ……ん？ なんで……さっき……」

唐突な告白に勝行は驚き、そのまま射精してしまいそうになる。

慌てて股間に力を込めてしばらく黙り込む。びゅっと我慢汁を漏らす程度で何とか堪えるも、すぐには動けそうにない。

「あたし……まだ、徹の……徹と、えっち……してなくって……まだ、さわって……触り合って……それで、舐めて……それだけで……あたし……」

「なんだ、まだやってなかったのか？」

「……はい……あたし」

「ははは、そりゃいい……。高杉のお古だと思って悔しかったが、まだ高島は処女だったか……。あはは、そいつは良かった。どれ、先生が初めての男になってやったぞ？ どうだ？ キモチイイだろ？」

「んう、やめ……。んっ、気持ち良くしないで……。先生なんて嫌い……。嫌いな……。あたし、ああん……。先生なんかに処女……。あげたく……。んっ、ないのに……。ああん、気持ちいいです……。せんせい、もっとついて……。あたし、マンコに入られると気持ち良くなって……。我慢できないんです……。んっんっんっ……。ああん！」

「くく、マンコの締め付けが凄いいぞ？ 高島……。先生のチンポ、そんなに気に入ったか？ くく、ああ、すごいなあ……。このまま中に出したいぞ？」

「だめ……。あたし……。中には……。困ります……」

「なーに、子供ができたら先生が責任もってやる。だから安心して妊娠しろ……」

「いやだ……。いや、先生なんかと……。んっ、ああん、先生、気持ちいいです……。ああん……。いやなのに、んっ、だめえ……。これ以上……。んっ、つかないで？ ずんずんされると、あたし……。んっ、んっ……」

ぱんぱんぱん……。ぱんぱんぱんぱんっぱんっぱんっ！

ゆっくり三回、その後は激しく何度も……。睦美はそれに合わせて嬌声を上げ、指を嚙んで快感を堪える。

「んっ、きもちい……。んっ、あ、んっ！ ああん！ んあ、あっ！ あっ！」

睦美は言葉を紡ぐことなく喘ぐ一歩になる。

お尻を勝行につき出し、お腹に何度も力を込める。もっと気持ち良くなりたいと勝行のチンポを絞めつけようと身体と心が彼に絡みつく。

「ああん、んっ！ せんせい、おちんちん！ ああん、先生のオチンチン！ ひどいです！ ああん、あたし、すごきもちよくって！ また、おしっこ、おしっこもらしちゃいそうです！ ああん！ だめえ！」

「くく、本当に高島はおしっこ漏らしだな……。この変態め。ほら、漏らせ！ 先生の前で漏らして見せろ」

「いやあん、だめ……。んっ、ああん、おねがい、やめて……。まって！ あ、あ、あ、あ！ ああんっ！ んっ、んっ！ んっ、んっ！ ああん！」

ぶっちゅぶっちゅと音を立ててぶっかる二人の結合部。互いの愛液が溢れ、内腿に汁が垂れ、糸を白くさせていた。

「んっ！ ああん、だめ、あ、出ちゃう！ 先生、だめ、いやあん！ みないで！ あ、あっ！ ああん！」

「くっ、あ、ぐ……」

ぱんぱんと音を立て睦美のお尻と勝行の股間。その動きがぴたりと止まり、二人とも苦悶の表情。けれど内側ではふわつくような快感が溢れ渦巻く。

「……………んっ！！ ああ！」

「……………くっ……」

二人が共に声を漏らす。同時ふしやあつと汁が溢れる。

「あ、やだ……いっちゃう……んっ、いっちゃった……ああん、やだあ……なんで漏れちゃうの？ おしっこ……おしっこもれちゃいやあ……」

びしゃあつとまき散らされる睦美のおしっこ。同時に膣内でビクンと勝行のチンポが跳ねる。びゅびゅつと精子を膣内にまき散らし、ドクンドクンと力強さを見せつける。

「くう……ああ、温かいぞ……高島のおしっこ……先生の身体にかかっているなあ……くう……この変態め……。まったく、ダメな子だなあ。しっかりしてると思ったのに……」

ぱちんとお尻を叩くと膣内がきゅつと締まる。それが尿道に残っていた精子を促す。

「くう……先生、沢山だしちゃったじゃないか……はあはあ……」

チンポが抜けると白い濁り汁が睦美のおしっこと混ざってとろおくと伸びる。

「んう……やだ、先生、本当に出したの……なんで……」

「しょうがないじゃないか。高島がおしっこを漏らしたんだ。先生だって精子もらしちゃうしかないじゃないか」

「そんな……んっ……ああん……」

睦美は割れ目を広げ、指でマンコから精子を掻きだそうとする。

ねばっこいにごり汁は思うように取れない。

「何をしているんだ、まったく……」

「だ、だって、精子、出さないと……あたし、妊娠したくないから……」

「ならエッチなんて最初からするんじゃない。高島は高杉とやるつもりだったんだろ？」

「それは、だって、コンドーム用意してたし……」

「コンドームだって絶対じゃないんだ。慌てるようならまだお前には早いってことだぞ」

「そんなこと、今言っても……」

今更になって突然教師面する勝行に徐々に苛立ちを覚える。

「せ、先生だってあたしが妊娠したら困るじゃないですか……」

「大丈夫。先生もちゃんとアフターピルを用意してる。24時間以内に飲めば効果があるぞ」

「な、なら……」

「そうはいかん。先生、高島のおしっこで身体がよごれちゃたじゃないか。綺麗になさい。そうしたらやろう」

「そんなのシャワーで……」

「高嶋の口で綺麗になさい……ちゃんと全身を舐めるんだぞ」

「い、嫌です。そんなこと……だって、おしっこ塗れじゃないですか……」

「全部高島のじゃないか。ほら、早く」

「嫌です……絶対に嫌……。先生、お願いですからピルください……じゃないと、先生もあたしも困るし……」

「……ふん、つまらん。しょうがないな……」

勝行は粗相塗れのままカメラの方へ歩き、包みを取り出す。それにはアフターピル30と書かれていた。

「しょうがない奴だな……」

「……ありがとうございます」

睦美はお礼を言うと錠剤を見る。ごくりと飲み込むとお腹を擦り、ほっと一息つく。するととろっと精子が太ももを滴るので、無駄とわかっていても指で掻きだし、さらにはシヤワーを強くあてはじめた。

「そんなに心配しなくてもこのピルは大丈夫だぞ。あと生理も軽くなるらしいぞ。良かったな」

「うるさいです……。もう、それより先生もさっさと洗ってください。おしっこまみれなんて……」

「くく、高島のおしっこ塗れだもんなあ……。じゃあ、洗ってくれるか？」

「自分でしてください！」

まだ溢れる精子を指で掻きだしながら、睦美はそっぽを向いた……。

＊＊

お風呂を上がって食堂へと向かうと、片付けられた部屋の中、先に来ていた健介がピザを切っていた。

「やあ、お疲れさん。さっき届いたよ。お茶もあるし食べていつてよ」

元治がティーバックのお茶を湯のみに一つずついれていた。

「先生、リッチですねえ」

普段、急須に一つ入れて時間を掛けてお茶を入れる徹は一人一つ使うことに驚いていた。

「そうなのかい？」

「こいつんちケチだから」

「うっせー」

徹はお茶を飲みながら新発売のピザを一切れもらう。

トマトと揚げナスの乗ったものでチーズとの塩加減が絶妙だった。

「美味しいですね」

「そう。それは良かった。今野さんもほら」

「はい……」

後ろを気にしていた真奈だが、元治に勧められてピザをもらう。

「うん、美味しい」

ぽつりとつぶやく真奈はどことなくぎこちなさがあった。

「なあ、委員長は？」

「ぐっ」

「うっ……」

この場に居ない睦美を思い出して健介が言う。

「まだお風呂なのかい？」

「さ、さあ……」

「わかりません」

顔色を変える二人だけれど元治は特に詮索はしなかった。

高島睦美はしっかりものだけれど先のこともあって話しかけづらい。できることなら力になりたいのだが、彼女の意思を無視せずか踏み込むことも返って反発を強めるかもしれない。面倒事への都合の良い言い訳と思いつつ、元治はその話を切り上げた。

「んちゅ、ちゅ……ぺろちゅ……ちゅう……んふう……」

「高島、ちゃんとチンポも扱くんのだぞ」

「うるさいなあ……。わかりました。ちゅ、ぺろ、ちゅぶちゅ……」

床に仰向けになり寝転がる勝行。その傍では睦美が四つん這いになり、身体を舌でなぞらせていた。

「ん〜、いいぞ……。ああ、もつと強く吸ってくれ……。ああそうだ、うん、だいぶ上手くなったぞ。さすが高島だ。飲み込みが早い」

「くっ……。誰がこんなこと……。ちゅ、ぺろちゅ……。ちゅ」

横たわる勝行の身体中を唇で奉仕する。自分の描けたおしっここの塩加減に唾液をだらだら垂らしつつ、時折ぺっと唾を吐く。

左手は勃起したチンポを握らされ、包皮に包まれたそれはぶちゅぶちゅ淫らな汁の弾ける音を立てながら赤黒い性器を見え隠れさせる。

「んっ……。こんなださいチンポ……。誰が……」

「くく、お前の初めてのチンポだぞ？ 愛おしいだろ？」

「ふん。こんな汚い未熟チンポ。さっさと手術でもしてくればいいじゃないの」



「はは、手厳しいな。どうせ高杉のだってこんな包茎なんだろう？」

「ふーんだ。徹のチンポは先生の違って皮剥けてるし……。先生こそ、あたしで童貞すてたんじゃないんですか？ あ、もしかして風俗ですか？ じゃあやっぱり素人童貞はあたしが相手なんですよね？ 教え子を無理やりなんて最低です」

チンポを握る手に力が入る。気持ちの中では握りつぶすつもりだけれど、当の勝行は気持ちよさそうに呻くだけ。

「くく、そう言っても高島、お前は先生に抱かれて気持ち良かったら？ おしっこもさすがらいよがりくるってなあ……くく、あの恰好を高杉に見せてやりたかったよ。どう思うだろうな？ ああ、そうだ。せっかくだし、高杉にビデオを見せてやろうか？ そうしたらどうなるだろうな？ 泣きながらオナニーするんじゃないか？ がっはっは」

「最低……下種教師……んちゅ……ちゅ……ぺろちゅ……」

教え子を容赦なく侮辱する様に睦美は眉を顰める。けれど今できることはそんな男の全身にキスすることだけ。

大体のところに唇を這わせたところで、睦美は身体を起こす。

「はい、終わりました……。もういいでしょ。全部舐めました」

「まだ終わってないぞ？ ここだ、ここ……」

勝行は自分の唇を指差して窄めて見せる。

「誰が！」

「なんだ？ もしかして高杉とキスもしてないのか？ ん？」

「別に……どうでも良いでしょ……」

「なんだ、図星か。くく、どうしようか。ファーストキスも先生がもらっておこうか？ そのほうがいいな。高杉とキスする時の練習だ。ほら、来なさい」

「嫌です。誰がそんなことするもんですか」

「もう一度言う。来なさい、高島」

「……くっ……」

カメラを弄りニヤ付く勝行。今のところ反撃の目処は無い……。今自分が居る場所を思い出す。ここはお風呂。お湯が浴槽になみなみとある。そしてカメラは電子機器。当然水には弱い。ならば……。

「この卑怯者。したいならすればいいじゃないですか……」

膝立ちで近づき、カメラをちらりと見る。キスをする距離で掴みかかればいくら男相手でもどうにかできる。

「さ、ここにキスだぞ…… ん」

目を瞑って唇をつき出す勝行には嫌悪感しか沸かない。だが、そのおかげで不意をつける。

「……！！」

飛びかかりカメラを掴む。しっかりつかんだ。二つの腕だ。勝行は片手。いくら相手が

男でも振じる様にすれば……！

「こら！ おい、やめなさい！」

「そっちこそ！ これさえなければ！ 誰があんたなんかに！」

睦美はカメラを奪い取り、そのまま風呂に飛び込む。

「これでどう！ もうこれで脅しは効かない……わ……」

カメラを浴槽につけたは良いものの、勝行は特に慌てた様子も無い。開き直ったにしては余裕があり、今にも嗤いだしそうだった。

「高島、そのボタンを押してみなさい」

「なに？ どういう意味よ」

「押せばわかるさ」

言われるまま、再生ボタンを押すと、カメラは機動音を立て、光を放つ。液晶画面には先ほど徹と弄りあっていた時の動画が再生されはじめた。

「どういうこと？ なんで？」

「なんでもなにも、これはもともと水中でも使えるんだよ。たかがお風呂に着けただけで壊れたらどうやって撮影するんだ？」

予想外のことになると、いつの間にか勝行が隣に来ており、腕を掴んできた。

「きゃっ！ はなして！」

「先生がっかりだぞ。キスしてくれると思ったのになあ……。それとも照れてるのか？ キスより先にセックスしたことが恥ずかしかったんじゃないか？ ん？」

「何言ってるのよ！ 誰が！ それにキスなら徹としたもん。あんたみたいなおとこと違って徹の方が……んっ！ むちゅ……ん……」

言い終わらない内に唇を塞がれる。それどころかねじ込まれる。生暖かい、ざらり、ぬめりとした舌を……。

「んちゅ、ちゅう……んぐ……んっ、ぷはあ……やめ……んちゅ……ちゅ……」

ねじ込まれた舌は睦美の口腔内を探りまわり、引っ込んでいた彼女の舌先を探り当てる。ねばつく唾液を流し込み、ぬるりと触れて来る勝行の舌。拒むもぐいぐいねじ込まれ、自分の唾液で苦しくなって飲み込む他がない。

「んちゅ……ちゅ……んふう……んちゅ……」

唇の角度を変えて何度も求めて来る。

何度か舌先が触れ合うとジンと脳裏に響く痺れが生まれる。

膣に響く刺激とは違う快感がくすぐる様に走り、徐々に舌先が絆されていく……。

「んちゅ……ちゅ……んちゅ……はあ、先生、やめ……んちゅ……ちゅ……」

目を瞑り舌先を楽にさせる。舌が唇裏まで戻ったところで勝行のそれと絡み合った。

「んふう……ああん……んちゅ……ちゅう……ぷはあ……はあはあ……せんせい……んちゅ……せんせい……」

唇が離れる度、責めるように先生と呟く睦美。キスに弱いのは明らかだった。

「そんなにキスがキモチイイか？ ん？」

「そんなこと……んっ、ないです……んちゅ……ちゅ……せんせい、キスしちゃいやす……んちゅ……」

「ちゅ……くく、高杉には舌入れたのか？」

「別に……いいじゃない、そんなこと……それより……んっ、そうじゃなくて、かつてキスでもして……満足してくださいよ……我慢しますから……んちゅ」

ちゅっと唇を窄めて勝行を求める仕草をしてしまう。だが勝行は顎を引いてキスをお預けするつもりらしい。

「せんせい、はやくおわらせたいの……だから、キスして勝手にいつちゃってくださいよ……ねえ、ねえ……」

早く終わらせるためと自分を誤魔化すも内心をしっかり見透かされている。それでも嘘を演じることで自分だけは騙したかった。

「キスってのはな、こうやって舌を入れるんだぞ？ 唇が触れる程度じゃ握手と一緒にわかるか？」

「んっ、わかりましたから……はやく……終わらせて、あたし、お風呂でないと皆が変に思うし……ねえ、せんせい……」

「くく、エロイ女だなあ、高島は……。先生、がっかりあぞ？」

「どうでもいいでしょ、あたしは……えっちかもしれないけど……」

母と同じと思うと悔しさがある。けれどそれを上回るのが今の欲情。身体の内側が火照り、唇でも乳房でも膣でも疼いてくすぐたくて気が狂いそうになっていた。

「先生とキスしたいんだな？ ん？」

「したくなんかないし……」

「じゃあしないぞ？ そうだな。よし、もう先生満足したし、出て良いぞ？」

「ええ……そんな……でも……」

「ピルも飲んだろ？ そうだ。動画も消してやろうじゃないか？ それが心残りだろうしなあ……」

「本当ですか？」

「ああ。その代りキスはしないぞ。良いな」

「そんなこと……当たり前じゃないですか。誰が先生なんかとキス……それよりもちゃんと消してください……」

「くく、焦るな……。よし、ここをこうしてだな……。いいか？ りむーぶって出るだろ？ ここで消去完了だ」

勝行がカメラを操作すると動画ファイルに削除と赤くチェックが付き、消去を尋ねる選択肢が出る。

「ほら、おしてみなさい。それで消えるぞ」

「う、うん……。あ、え、これで本当に？」

「ああ、これで消えたぞ。くく、残念だなあ、先生、高島とキスしたかったのに、それにもう一回ぐらいセックスしたかったぞ？ おしっこ漏らされるのは困るけどな」

「う、うっさい！ 残念でした！ もう弱みなんて無いし、二度と先生になんかせませんから！ この変態教師！ 包茎！ 屑、下種！ 素人童貞！」

思いつく侮辱の言葉を並べる睦美だけれど勝行は愉快そうに嗤うだけ。

「ふん、せいぜい余裕ぶってればいいわ。どうせ後で削除したこと後悔するんだから」

「ああ、後悔してるぞ。先生、やっぱり消さなければ良かったなあと思ってる」

「ほーらみなさい、でも残念でした！ 削除したからにはもう先生の言うことなんて聞く必要ありませんからねーだ！」

あっかんべーをしながら踵を返す睦美。わざとらしく湯を弾かせながらシャワーを浴びる。

「なあ、高島、本当に先生とキスしたくないか？ ん？」

「したくなんかありません。自惚れないでください！」

取りつく島も無くキーキー喚く睦美に勝行はにやけ面を崩さない。

「くく、素直じゃないなあ……。それじゃあこれをあげよう。今野に使うつもりだったが、高島に貸してやろう」

「今野？ 先生、今野さんにまでこんなことをするつもりだったんですか！ 最低です！ あたし、絶対に許しません！ 絶対に先生のこと、教育委員会に報告して……」

「わかったわかった……。それじゃあ先生上がるからな」

「本気ですからね！ あたし、絶対に先生のこと！」

去っていく勝行の背中に声を荒げる睦美。反響の良い浴場ではそれはきんきんと響くけれど、当の勝行は無視を決め込む。

「くそ、最低教師……なによこんなもの！」

手渡されたモノの使い方は前に雑誌の特集で見たことがある。確かこれは……。

＊＊

「ふう、美味しかった……」

一通り食べ終えた健介は腹を押えてお茶を飲んでいた。

「残りは委員長でいいのかな？ あ、しまった岩村先生の分」

「大丈夫だろ？ 先生は自分の分ぐらい自分で買うだろ」

「まあそうだな」

とはいえ、彼の分を残していないという事実が気まずいので箱を処分し、ピザの残りを皿に移す。

「……」

段ボール紙を小さくまとめて隅のゴミ箱に入れたところで戸が開く。

「わっ！」

「きゃっ」

静かに開いた戸に軽く悲鳴。同時にやって来たのが睦美だと知りほっとする一同。さらにその背後に勝行が居たので再び気が詰まる。

「ん？ どうしたんだ？ お前ら」

「あ、いえ……なんでもないです」

ピザの箱は片付けたが臭いが残る。さすがに教員である彼が意地汚く要求するとは思えないが、仲間はずれの形になったことに腹を立てるかもしれない。

「ふん。それより今日はご苦労だったな。そろそろ遅くなってきたし、気を付けて帰るんだぞ」

「え？ あ、はい……」

意外にも労をねぎらってくれる勝行の言葉に徹も健介も顔を見合わせる。とはいえあまり変に勘繰っては秋の空のように移り変わりやすい勝行の機嫌を損ねかねないと素直に頷く。

「そ、それじゃ俺らも帰るか」

唇についた油っぽさを指で拭い、荷物を手にする。

「ああ、それじゃあ先生達、俺らはこれで失礼します。今日はお疲れ様でした」

ピザのお礼は言わずに深く頭を下げる。

「行こうぜ、真奈」

「うん……」

健介はピザのこともあって真奈を急かす。この場に留まって何を言われるかわからないという意識に背中を押されていたが、徹は頬を掻いて足踏みしていた。

「おい、徹？」

「あ、わarii、先行ってて」



いつになく変な笑顔、それも照れくさそうな顔をする徹を後目に健介は首を傾げる。ふと視線の先にピザの残りのラッピングを見て、睦美に渡すのだなと思ひ納得する。

「真奈、行こうぜ。アレは徹が渡してくれるし」

「そう……うん。わかった」

真奈は視線を落したまま頷くと足早に室内を出た……。

＊＊

健介たちに遅れて部屋を出る徹と睦美。その廊下で徹は照れくさそうに口を開く。

「あ、ええと、イイン……ちよ、っていうか睦美……、その、さ」

お風呂場での出来事を思い、徹は上手く言葉を選べないようだった。

「なあに？」

「いや、その……、改めて、その……」

「したい？」

「え！？ あ、いや、そうじゃなくて……、その、俺達さ、なんていうか、やっぱり特別な関係になった……ってことで良いんだよね？」

「……うん。徹、改めまして、ふつつかものですけど……」

真っ赤になりながら睦美は真面目な顔つきで徹を見下ろす。

「お、おれこそ……その、見限られないように頑張るよ、うん。っていうか、睦美は頭良いもんな。俺も頑張らないと……」

「うふふ……。大丈夫だよ。徹。アタシが徹に合わせてあげる……。だから、その、徹こそ、あたしのこと……見捨てないで……欲しいな」

眉を顰め、少し涙を見せながら告げる睦美。指でそれを拭い、笑顔になる。

「さ、帰ろっか……」

「ああ……」

二人は先に帰ったから睦美と二人切り。そう思うと二人が気を遣ってくれたのかと思い、気持ちが良い意味でざわつく。

これまで女子と親密な関係になるということを意識したことは無かったけれど、いざこうして突然ながらも睦美とそういう心身の距離になることに気持ちが浮き立ってしまう。恋というものはそういうものなのだろうか？ そんなもやもやした温かさを抱きつつ、少しの距離をゆつくりと歩きたかった。

「ん？」

歩いていると睦美が何かを落したのでそれを拾い上げる。

「おい、睦美、何か……」

「高嶋、お前足を痛めたんだって？」

話しかけようとしたところで勝行が顔を出す。

「え、あはい……。その、少し……」

「そうか。それは良くないな。よし、先生が車で送って行こう」

「え……あ、それは……」

「遠慮するな。色々手伝わってもらったしな。高杉も一緒に送って行こうか」

「え？ 俺も良いんですか？」

「ああ。お前も今日は色々疲れただろう？ 手伝ってもらったし、先生ばかり良い気持ちしちゃ悪いからな。さ、こっちだ」

「あ、はい……」

いつになく上機嫌な勝行に急かされ、車に乗せられた……。

「ええと、確か高杉の家は……」

カーナビを操作するとそれに従って車を走らせる。

土曜の夕暮れ時、街へ向かう車で道路は比較的込んでいた。対し田舎でありながら街から戻る車はまばらだった。

古い車なのか振動音が響き、それを誤魔化す為のカーステレオの音がうるさかった。

「……んっ」

後部座席で座っていた二人。投げ出していた手に睦美の手が触れる。

「あ……」

彼女の冷たくてしっとりとした手が触れる。少し前までなら女子から手を握られるなどバカにされるだけでしかなかったが、今は握り返していた。

言葉を交わすには余計な奴がいる。変に茶化されたくないからこうして手だけで繋がっている。そう思い、逆の窓を見ていた。

「ん？ どうした？ 二人とも手なんか繋いで……。なんだ、仲が良いんだな」

「……別にそういうわけじゃ……。んっ……。ないですけど……」

「……高島さんのことが好きなんです」

誤魔化そうとする睦美に対し、徹はしっかりと断言した。

半笑いの勝行に二人の気持ちを揶揄されたくない。そう思うと自然と口から出た。自分でも驚くような強い口調で。

「はっはっは、そうなのか。そりゃ初耳だ。てっきり高杉は今野と仲が良いからそうだと思ったんだが、そうか。高島が好きだったのか。ふふ、なるほどなあ……くく」

「なんか変ですか？」

「いや、そうだなあ。ほら、今朝高島が家出した時に高杉が必死で村を探して居たって聞いてな。なるほど、そういうことかと思ってな。いや、悪い。からかうつもりじゃなかったんだ」

勝行はわらいながら車を進ませる。渋滞気味な道路のせいで少し進むとすぐにまた止まった。

「んっ！」

睦美が高い声を出し、徹の手を強く掴む。

「おい大丈夫か？」

車酔いでもしたのか睦美の顔を見る。その顔色は血色もよく桜色。あの後もしっかりお風呂に入っていたのだろーと思ひ、徹は恥かしさからか顔を背けた。

「すまん。急ブレーキ踏んじやって……」

「き、気を付けてください……よ」

睦美は俯き気味で文句を言っていた……。

「ありがとうございます」

家の近くまで来たところで車を降りる。これなら歩いて帰ったほうが早かったと思いつつ、徹は一応のお礼を言う。

「睦美、また月曜日な」

「う、うん……」

窓際で笑顔を返す睦美と手を振り合う。

潤んだ瞳を見つめるともう少し一緒に居たいと思えたし、家まで送りたいかった。

「それじゃあ先生、失礼します」

「ああ。高杉も気をつけてな。今日は色々美味しかったよ」

「え!？」

まさかピザのことがばれていたのだろうか？ 徹は渡すはずだったピザをどうしたものかと鞆の中で探る。

既に冷えたピザ。ラップが不完全だったのか油分が漏れているのを感じる。

「あ、その、俺……」

「ははは。それじゃあな」

勝行は普段に無いぐらい快活に笑うと車を走らせた。

「……やばいな。ばれてたか……」

ピザを取り出すと具がずれて生地が見えていた。見た目も悪くなったそれを齧ると冷たく生臭い。それでもせっかく元治が買ってくれたのだからと残さず食べる。

「あーあ……、ったく、あの野郎……、邪魔しやがって」

せっかくだからもう少し睦美と一緒に居たかったのに……。それを邪魔する勝行にはいらさせられる。本当ならこのピザだって睦美と……。

手が油で汚れたので何か拭くものを探す。ティッシュも油で汚れているので他にないかと探すと、先ほど拾った布を手にする。

「？」

オレンジと青の布地は広げるとそれはおそらく誰かのパンティ。

「やべ、睦美の……」

途端、チンポが固くなる。これで覆われたアソコはそれを入れると……。

むずむずするチンポのおさまりは悪い。睦美がどこまでするつもりだったのかは知らないけれど、もしかしたら最期まで……。

「いやいやいや……。そういうのはちゃんとお互いに好きっていう気持ちをちゃんと……。清く正しく……。うん」

欲情だけの不純な気持ちだけでなく精神的なモノこそ優先したいと思うのは、徹自身、まだ恋に対してのイメージが綺麗なものだからだろうか？

「……おっばい、柔らかかったな……」

手に残る睦美のおっぱいの感触はしばらく忘れることはできそうにない。

「もし頼んだら、触らせてくれるのかな……なんてな……」

きっと彼女は笑顔で許してくれるけれど、あまりしつこいのも嫌われるかもしれない。焦る必要はない。少しずつ、ゆっくり……、彼女との関係を深めていけば……。

ふと振り返る。まだ車は遅々として進まない。村へ帰る車道なら空いているのに、これから街へ向かう車は………？

「あれ？」

何か違和感がある。

睦美の家は反対側では？

「変だな……」

勝行の車を目で追ううちに、徐々に渋滞が解消されていった……。